

主 題：重荷を負い合う神の家族**聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 6章1節****テーマ：兄弟姉妹の罪に対してどのように私たちは応答すべきなのか？**

今朝、一緒に見ていきたいのは、ガラテヤ人への手紙6章のみことばです。タイトルにもあるように、私たちは、重荷を負い合う神の家族について、もっと言えば神の家族、兄弟姉妹の間に起きる罪にどのように応答するのかについて、6章特に1節から5節を中心にいま一度考えてみたいと思います。神の家族、兄弟姉妹の間に起きる罪にどのように応答するのかです。今のを聞いて、「兄弟姉妹の間に起きる罪にどう応答するのか、いやいやもっと実践的な学びをしてください。私たち浜寺聖書教会の中に罪を犯す人はいません。」と言う人はいないのはよくわかっています。むしろそれ以上に私たちはよく知っています。教会として、神の家族として生きていこうとすれば、そこにはさまざまな難しさやチャレンジが伴うのです。残念ながら、私たちは救われた後もみな罪の性質を持った罪人であるがゆえに、本来であれば、お互いの成長のためになることをすべきにも関わらず、自分のことを考えて人を傷つけてしまうことがあります。みことばが教えているように、お互いに愛し合って、愛を実践すべきなのに許し合うことができません。互いにへりくだって仕え合っていくべきなのに、自分がだれかに仕えられることを望んで、思い通りにならなければ不平不満を覚えてしまうこともあります。もちろん兄弟姉妹と一緒にあって、ともに賛美をして交わりをすることは非常に楽しいものです。奉仕や学びをともにし、信仰の家族として実際に時間を過ごせば過ごすほど、相手のことがよりわかるようになり、そしてそれぞれの内の罪が見えてきます。お互いの間の罪が見えてきたら、その罪に対してどのように応答していますか？

ある人は、もしかしたらその罪に極力関わらないようにしているかもしれませんが。問題に手をつけてしまうと、その関係に難しさや痛みが生じることをわかっているからこそ、目をそらしてしまうかもしれません。ある人は、もしかしたらその罪を見て見ぬふりをしているかもしれません。あたかも問題自体が存在していないかのように人前ではふるまって、隠れたところではその人の陰口やゴシップを軽く口しているかもしれません。ある人は、その人を助けてあげたいと願って、その罪を指摘しようとするかもしれません。でもその人が間違いを指摘されたことに反発し、怒りを露わにするのであれば、もうこんな経験は二度としたくないとかたくなになってしまうだけでなく、その相手に対して憤りや苦い思いをずっと持ち続けるかもしれません。私たちはみな罪に対して、間違った応答をしてしまうことがあります。そして、それが原因で、同じ神の家族として生きているはずの兄弟との関係がこじれたり、姉妹との関係が壊れてしまうことがあるのです。そしてそんなことを繰り返し、繰り返し味わっていけば、こんな疑問を覚えるようになるかもしれません。職場や近所に住んでいる未信者がみことばに沿った行動をしないのはわかります。神様に逆らういろいろな罪を犯して、自分に大きな苦しみをもたらしたとしても、悲しいけれど、彼らのことであれば理解できますと。でも教会にあって、彼らと同じようなことをする人がいるのは受け入れられませんと。主を愛し、みことばを知っていると言うのであれば、どうしてあのような態度をとるのでしょうか？どうして何度も傷つけるような態度をとるのでしょうか？それは全く私には理解できませんと。こうして私たちは教会の中において、他の兄弟姉妹が罪を犯せば心を乱して心をかたくなにしてしまうことがあります。実際に、天で主にお会いするその日まで、この地上で過ごすすべての間、私たちは自分自身を含めだれであれ罪を持っているので、みな罪を犯してしまうにもかかわらず、私たちは心のどこかで問題なんて起きないと信じていることがあります。

しかし、私たちが知っているとおりに罪は現実の問題としてあるのです。罪があるからこそ私たちの間に問題が起きることがあります。だからこそ私たちはこの罪の問題に対して、聖書的に解決する方法を正しく知っていなくてははいけません。神の家族が兄弟姉妹の間を騒がすような出来事が起きたのであれば、どのようにしてそれに応答すべきかをみことばからきちんと知っていないといけません。そして感謝なのは、“今月のみことば”として見る6章の2節を含めたこの1-5節の部分に、パウロは、私たちがとるべき正しい応答を教えてくださいました。特に1-5節のところでは10個その要素を見てとることができます。もちろんきょう全部見ないので安心してください。きょうは1番から3番まで見ていきます。

まず、みことばをお読みしますので自分のこととして考えながら、神のみことばに耳を傾けてください。

ガラテヤ 6：1-5

「1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。 :2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。 :3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。 :4 おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。 :5 人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」

では、罪に対する正しい応答の一つ目の要素から考えてみましょう。

○兄弟姉妹の罪に対する正しい応答：10個の要素

1. 同じ家族に属する者であると覚えること 1 a 節

▶「兄弟たちよ」(c f. ガラテヤ1：11；3：15；4：12, 28, 31；5：11, 13；6：1；6：18)

私たちが、罪を犯している兄弟姉妹を目にするのなら、私たちはその者が自分と同じ神様を愛している家族の一員だとまず心に留めることが大切です。1節を見ていただくと、パウロはこんなことばで1節を始めていました。「兄弟たちよ」とパウロは呼びかけていました。このことばだけを耳にすると、私たちは余り何も思わないかもしれませんが、でもこの手紙全体の流れを少し思い出してみてください。ガラテヤの諸教会に宛てて記されたこの手紙は、最初からパウロの厳しいことばであふれていました。普段のパウロの手紙の書き方は、「あなたがたのために神に感謝しています」とか、「あなたがたのことを覚えて祈っています」といった感謝や励ましをあいさつの初めに記してしていました。そのパウロがこの手紙ではいきなり教会に対する、信仰者たちに対する非難のことばを送っていたのです。ガラテヤ1：6に、簡単なあいさつだけ記したパウロは、「私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。」と書いています。手紙の始まりがこのようでした。そしてもちろん手紙の全体を通して、彼はキリストとその福音を捨ててさまよっているような者たちの歩みを何度も戒めていました。手紙の真ん中の3：1にも「ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。」と記してありました。パウロは、非常に厳しいことばを繰り返してました。間違った道へと、誤った道へと突き進もうとする人々の間違いを明らかにして、彼らを正そうとされていたのです。

その上ガラテヤの信仰者たちは、互いの間に問題を抱えていました。彼らの内には激しい争いや対立が頻繁に起こっていたのでしょう。だからこそそんな態度に対する警告が何回か発せられていました。ガラテヤ5：15に「もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいます。気をつけなさい。」と書いています。また5：26にこう書いています。「互いにいどみ合ったり、そねみ

合ったりして、虚栄に走ることをないようにしましょう。」と。間違いなくガラテヤの信仰者たちの間にもさまざまな問題は起こっていました。さて、ちょっと立ち止まって考えてみてください。パウロの立場に立つと、自分がかつて熱心に宣べ伝えたキリストの福音から離れて、そして勝手に揺らいでいるような者たちのことを目にしたら、単に憤りや呆れを覚えてもおかしくはなかったかもしれません。彼らに対する怒りや不満の思いから、単に厳しいことばだけを投げかけるような危険もあったかもしれません。またガラテヤの信仰者の立場に立ってみてください。詳しい理由はわかりませんが、彼らはさまざまな問題を抱えて互いに傷つけ合うことがありました。もし自分をひどく扱った兄弟姉妹が罪を犯しているのを見たら、それこそ恰好の仕返しの機会だと考えたかもしれません。その人に対して思いやりを示すのではなくて、冷たくあしらったり、ただ責め立てるための機会として考える危険もあったかもしれません。さまざまな問題がありました。でもそんなパウロが、ガラテヤの信仰者たちに向かって「兄弟たちよ」と口にしていたのです。しかも一度だけではありません。パウロはこの手紙を通して、実に同じことばを9回も用いて、彼らに呼びかけていました。「兄弟たちよ、兄弟たちよ、兄弟たちよ」と。

手紙の最後となる6：18にパウロは「どうか、私たちの主イエス・キリストの恵みが、兄弟たちよ、あなたがたの霊とともにありますように。アーメン。」と締めくくっていました。つまりパウロの厳しい非難のことばは、決して彼自身の呆れや不満といったものから来たのではなかったのです。彼は手紙の中で確かに厳しいことばを発してはいました。でもそれは手紙を通して彼自身の憤りをただぶちまけていたのではなかったのです。彼のことばの根底には間違いなく彼らに対する愛情がありました。同じ神様を愛しているその家族の一員、兄弟姉妹だと覚えているからこそ、さまよっている彼らに対しても、厳しい愛のことばを記したのと同時に、「兄弟たちよ」と、自分を含めて同じ神の家族に属していることを思い出させていたのです。そして、それを聞いたガラテヤの信仰者たちの立場に立ってみてください。さまざまな問題を抱えている自分たちにパウロが「兄弟たちよ」と呼びかけるのです。そして自分たちも思い出していたのです。たとえ罪の問題がお互いの間にあったとしても、自分たちはばらばらではなく同じ兄弟なのだ、同じ信仰の家族に属している兄弟姉妹たちなのだ。これは今の私たちも覚えておかなければならない事実です。

ある人は、だれかが自分に罪を犯せば、すぐにこんな考えに陥るかもしれません。こんなひどいことをするような人と私は関わりを持ちたくありません。こんなひどいことをするような人を私は自分の兄弟姉妹と認めたくもありません。そうして距離を取ったり、冷たく接したり、憤りや疑念を心に抱くようになるかもしれません。でもそんな時こそ忘れてはならないのは、私たちは神の家族として生きているということです。私たちがこの神の家族に属する者となったのは、ただ神様の恵みのみわざでしかないということです。みことばは、繰り返しキリストを信じて救われた時、他のだれでもない神様が私たちをご自分の子どもとしてくださると教えていました。私たちがなろうとしてなるものではありません。神様がそのように召してくださるのです。例えばヨハネ1：12に「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」と書いています。今私たちが見ているガラテヤの3：26でガラテヤの信仰者たちにも言っていました。「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。」と。言いかえれば、キリストによって救われた者はみな同じ父を持っている神の子どもとされたのです。同じ父を持っている兄弟姉妹として変えられたのです。私たちが兄弟姉妹になろうと思ってなったのではありません。私たちはただキリスト・イエスを信じた信仰によって同じ父を持つ者と変えられました。私たちが、自分の力で手にしたものではないのです。だからこそ、確かに難しさを覚えるかもしれません。あの兄弟とうまくやっていくことができません、あの姉妹を愛することは難しいです。でも覚えなくてはいけないのは、救われた私たちは、今同じ神様から生まれ、同じ神様を愛する家族の一員として生かされていることです。私たちを一つの関係として今結び付けているのは、私たちの考えはありません。私たちの好みでも、人種や国籍、文化でもありません。

私たちを一つとしているのは、ただ同じ神様、ただ同じキリストのゆえです。私たちは同じ神様によって生まれているからこそ、私は私を生んでくださった神様を愛します。けれども、私を生んでくださった神様から同じように生まれた兄弟姉妹を愛しません、あの兄弟は私の兄弟ではありませんと言えるような者はひとりとしていないのです。ヨハネもはっきりと述べていました。Ⅰヨハネ5：1に「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。」と。神様を愛する者は、同じように兄弟姉妹をも愛する者でした。神様から生まれた者は生んでくださった方を愛します。そして、同じようにして生まれた者たちをも愛そうとするのです。それが私たち変えられた者の姿でした。兄弟姉妹は、互いにいがみ合ったり、敵対する者ではありません。どちらがすぐれているかを争ったりする者でもありません。私たちは、みな足りないところを抱えています。だからこそ支え合い、励まし合い、重荷を負い合おうとするのです。信仰の家族の内に、弱みや痛みや罪を見るのなら、私たちは、同じ神様を愛しているからこそ同じ神様を愛する者として一緒に歩んで行こうとします。そして、同じ神様から目を引き離そうとする罪を犯している者を見たら、そっちへ行ってはだめです、同じ神様を見上げよう。そうして罪を見て見ぬふりをするのではなく、愛をもって向き合おうとするのです。もし私たちが罪を犯している兄弟姉妹を見たのなら、その者が私たちと同じ神様によって救われ、同じ神様によって同じ家族に属する者へと変えられていると覚えること、それが、私たちが罪に対してとるべき一つ目の正しい応答でした。

2. あわれみをもって罪を取り扱うこと 1b節

次に罪に対する正しい応答の二つ目の要素は、あわれみをもって罪を取り扱うことです。このように続きに記されてきました。ガラテヤ6：1「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら」とあります。ここでよく考えてほしい興味深いことばが二つ出てきていました。

▶「あやまち」

一つ目は、「あやまち」ということばです。このことばには、もともと「何かにつまずく」とか「正しい道から足を踏み外してしまう」というイメージが含まれています。そしてここから、ある人が意図的に間違った方向へ進んで行くというよりも、あやまって犯す失敗や一線を越えてしまった違反行為や罪という意味を表しました。ウィリアム・バークレー師もこのことばをこのように定義しています。「(あやまちは)意図的に犯した罪ではなくて、凍結した道路とか危険な小道で、誰に起こるか分からない踏みはずしを意味する言葉である。」と。このイメージを頭に入れておいてください。

▶「陥ったなら」

もう一つは「陥ったなら」ということばです。このことばには、もともと「何かに追いつかれる」とか「何かに突然捕まる」という意味、また、「不意を突かれて驚かされる」といった意味もあります。まるで空を自由に飛んでいた蝶々が突然蜘蛛の巣に捕まってしまうかのように、走り回っていた動物が仕掛けられていたわなに気づかずわなに突然引っかかって驚かされるように、この「陥ったなら」ということばは、予期せぬ時に急に捕らえられる驚きを表します。

この「あやまち」と「陥ったなら」という二つのことばを用いて、パウロは、「もしだれかがあやまちに陥ったなら」と口にしていました。言いかえれば、もし兄弟姉妹が不意に道を踏み外すようであれば、もし兄弟姉妹が突然予期せぬ罪に捕まるようなことがあればと述べていたのです。でもこれはいったい何を言わんとしたのでしょうか。まず絶対に勘違いしてほしくないのは、パウロはここで罪というものを軽く扱おうとしていたのではいっさいないということです。たとえ意図的でないように見えるあやまちも、聖なる神様の前では罪は罪でした。自分たちの犯した罪は、どんなものであれ神様に逆らうものであるから、私たちはすべてに責任を負っているのです。ですから、不意に降ってきたから責任を問われませんという話をしようとしているではありません。

では、何の話をしているのかと言うと、パウロは罪の別の側面を描いていました。パウロは、罪の深刻さ、危険さに加えて信仰者の弱さを彼は正しくわかっていたのです。そしてこれがポイントです。信仰者は時にその弱さや愚かさゆえに罪に惑わされ、道を踏み外し、思いもしないような深刻な罪に陥ってしまうことも実際に起き得るということです。ひとりの注解者もこの部分をこのように説明していました。「この兄弟は、『捕えられて』しまったのです。彼は罪から逃げようとし、罪を避けようとした。しかし、その弱さのゆえに、祈りの欠如、主に勝利を求めなかったがゆえに、捕えられてしまったのです。」と。この姿を想像できますか？神様に救われた者が、罪から離れて神様に喜ばれることを求めて熱心に真っ直ぐに生きていこうと歩んでいるのです。真っ直ぐな正しい道を罪から離れて走って行こうとしています。でも、その者が時に油断するのです。罪の恐ろしさに心を留めずに、何も考えずに道端に落ちているような誘惑に心が引かれて、そしてそれに近づいたら、気づいた時には罪のわなに捕えられているのです。

具体的に挙げようとしたらいろいろなことを挙げることはできますが、もしかしたら私たちの心の内で始まる小さな妥協かもしれません。神様の前に正しく歩もうと思っても、私たちは、時に神様の前に喜ばれないとわかっているにもかかわらず、少しだけなら大丈夫だろうと妥協するかもしれません。いろいろなことを学んで、いろいろな知識を蓄えたので今は、自分の力で罪の誘惑に負けることはないだろうと、間違った確信を抱いているかもしれません。自分の力で、信仰生活を生きていけないことはわかっているけれども、今は忙しいから、みことばや祈りの時間を後回しにしても別にいいだろうと、少しずつ妥協して、そして少しずつ罪に対する自分自身の守りを緩めていけば、その結果、思いがけない時に深刻な罪に捕まって一線を大きく越えてしまい、ひどく神様や周りを悲しませることにつながることもあるのです。自分自身が大丈夫だと安心した時に、大きな罪を犯してしまう。このような弱さや愚かさを私たちは持っています。周りの者たちが「危険だから離れなさい」と助言していたとしても、自分自身を過信して、そのみことばに耳を貸さず、私たちはこれまでにどれだけ罪を犯してきたことでしょうか。私たちは、そんな罪の恐ろしさを知っています。私たちは、自分たちの罪深さや弱さを覚えています。そして、それを覚えているからこそ、もしほかの人が罪を犯すような時、その人に対してあわれみをもってその罪を取り扱おうとするのです。自分もその罪に陥る危険性を知っているからこそ、もし罪に陥っている兄弟姉妹がいるのであれば、その人の問題をあわれみや愛をもって扱おうとするのです。

実際、果たして私たちは、自分の弱さを知っている者としてだれかが罪に陥ったのを耳にしたり、目にしたりする時、あわれみを進んで示そうとするのでしょうか？罪の恐ろしさを知っているからこそ、罪に捕まっている兄弟姉妹を見た時に、わなに引っかかっている兄弟姉妹を見た時に、助けを差し出そうとするのでしょうか？それともあやまちに陥った者がいれば、その者のことをすぐに心の中で断罪して、非難していたり、厳しくさばいていたりしないのでしょうか？自分のことを棚に上げて、どうしてこの人はこんなに賢くない選択をするのだろうか、どうしてこんな誘惑に負けて、神様に逆らうようなことをするのだろうか、余りにも愚か過ぎるよと、自分だったらこんな行動はしないのにと。こうして私たちは、自分自身にも弱さを覚えているにもかかわらず、自分自身も同じような愚かさを持っているにもかかわらず、それを棚に上げて罪に捕えられた兄弟姉妹にあわれみを示そうとしないことがあります。でもそんな時こそ、私たちは忘れてはいけません。私たち自身がいまだに肉との戦いを抱え続けているように、他の兄弟姉妹もその罪の性質を持っているのです。日々の生活の中でどれだけ罪との葛藤に難しさを覚えますか？神様を喜ばせたいと熱心に歩んでいたとしても私たちは御霊に逆らって自分自身の肉を喜ばせたいと激しく働く罪との戦いに敗北することすらあるのです。私たちが、同じように持っているそれを、皆さんの隣にいる兄弟姉妹も持っているのです。

ましてあのパウロでさえはっきりとこう口にしていました。ローマ7：19-20で「19 私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。20 もし私が自分でしたくないことを

しているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。」と。私たちは、弱さを持っています。同じ弱さを他の兄弟姉妹も持っています。だとすれば、他の兄弟姉妹の罪を見る時少なくとも私たちはいつも心に覚えることができます。この人は自分と同じ神様の家族に属している一員であるだけでなく、同じように罪から離れ神様の前に喜ばれることをしたいと願っている兄弟姉妹なのだ。そしてその兄弟姉妹が、今は自分も持っているような弱さや愚かさによって罪に捕まってしまっているかもしれないと。あやまちに陥って苦しんでいるのかもしれないと。愛する兄弟姉妹がわなに引っかかっているのであれば、自分も忌み嫌うような罪に、その兄弟が引っかかっているのであれば、私たちはできる助けをもって、愛をもって喜んで、その人に助けを与えようとするのです。問題を見て見ぬふりをするのではありません。改めて振り返ってみても、まさにガラテヤの信仰者たちに対してパウロは、そのような態度をとっていました。多くの問題や弱さを抱えていたガラテヤの信仰者たちのことをパウロは、「兄弟たち」と呼んで、あわれみを示して、同時に同じ神の家族であることがわかっているからこそ、彼はその愛のゆえに彼らの罪を厳しく、正しく取り扱っているのです。愛する神の家族のだけれど、正しい道を踏み外してしまって、誤った道へと陥って苦しんでいるのを見るのなら、私たちもその罪の恐ろしさを知っているからこそお互いあわれみを示して、どのような罪であろうと、それに苦しんでいる者を助けようとするのです。あわれみをもって罪を取り扱うこと、それが罪に対して私たちが取るべき二つ目の正しい応答でした。

3. 御霊に満たされて兄弟に向き合うこと 1c節

さて、最後に罪に対する正しい応答の三つ目は御霊に満たされて兄弟に向き合うことです。ここまで私たちは、あやまちに陥った同じ神の家族を助ける責任があると改めて考えてきました。私たちがみな同じ神の家族に属しているのなら、その責任を負っているのです。ある人は、それでもこのように思うかもしれません。自分にはそんなことはできませんと、他のだれかに自分は任せようと思えます。罪や問題に苦しんでいる兄弟姉妹を目にしたとしても、自分ではなくて教会のリーダーが代わりに取り扱ってくれればと考えているかもしれません。確かに教会のリーダーには羊を導く大切な務めが与えられています。でももう一度を1節を見てみると、パウロは特にこんなことばを続きに記していました。「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは……」と。ここで言う「御霊の人」、これはいったいだれのことでしょうか？完璧な人のことでしょうか？何かしら特別な知識や体験を持っているような限られた人のことでしょうか？そうではありません。ガラテヤの文脈から考えると「御霊の人」とは、救われたすべての者たち、御霊とともに歩んでいる者たちのことを表していました。御霊とともに生きている者たち、御霊によって導かれている者たち、御霊によって進んでいる者たちのことを表していたのです。一部ではありません。ガラテヤの信仰者たちのことを考えてみると、彼らは確かに弱さを抱えていました。でもキリストの信仰のゆえに彼らも既に御霊を受けて、そして御霊とともに日々を歩んでいる者たちでした。ガラテヤの手紙を見ていくとこんなことばが繰り返し使われています。ガラテヤ3：2に戻ってみると、このように書いていました。「ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。」と。4：6を見てみるとこのように書いていました。「そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。」と。5：16を見ていただくと、「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」と書いていました。18節にもこう書いています。「しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。」と。また25節を見ても「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」と書いていました。こうして御霊が与えられていること、御霊によって生きていくことを求められ続けてきたのです。

そして、御霊に満たされている者たちの責任は、互いの中で必要な霊的ケアをすることでした。もしだれがあやまちに陥ったのであれば、御霊の人であるあなたがたが、それをしなさいと。つまり教会のリーダーだけの責任、務めではなかったのです。もし神の家族に属していて、救われ、キリスト・イエスに対する信仰を持って造りかえられているのなら、これはすべての者に託された責任でした。もし御霊によって生きていて、御霊に導かれて御霊の実を結んでいる信仰者であるならば、罪に陥った他の兄弟姉妹の問題は、人ごとではありません。その兄弟と向き合い、その者の必要とする助けを与えることは、ほかのだれでもない神様から託されている務めなのです。これは、私たちがやります、やりませんと選択できるものではありません。もしあやまちに陥っている神の家族を見るのなら、大丈夫？とその人に手を差し伸べるのは、私たち自身の重大な責任、務めだったのです。

思い返してみれば、これはイエス様が求めておられたことでした。マタイ 18 : 15 に「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。」と記されています。ここで改めて少し考えてみてください。イエス様は、兄弟が罪を犯した場合に触れています。兄弟が罪を犯した場合は、いったいだれがその兄弟の罪を責める責任を負っているとイエス様は言われていましたか？それはほかのだれでもないあなたでした。もし兄弟姉妹が罪に陥っているのを見るのなら、彼らが自分に対して罪を犯したのなら、その罪に気づいた私やあなたがその人のところに行って、個人的に罪を知らせる必要があるのです。でもこれを聞くと多くの人たちが、このように考えます。相手が罪を犯したのであれば、まして相手が自分を傷つけたのであれば、先に相手が自分のところにやって来るのが当然ではないですか、なぜ私が行かないといけないのですかと。覚えておかないといけないのは、イエス様はここで「行って」、「責めなさい」という二つのことばをどちらも命令形で書いていました。要するに罪を犯した者のところに行って問題を取り扱うことは、ただの提案ではなかったのです。私たちがやるかやらないかを決められるものではなかったのです。私たちが愛している主が、私たちにしなさいと託された大切な責任だったのです。

だからこそ、私たちは兄弟姉妹が罪を犯しているのを目の当たりにするのなら、その人のところに行き、みずからみことばから罪に気づかせようとするのです。兄弟、あなたがしていることは正しくありません、私が言っているのでも私の考えでもありません。みことばがこう言っています、みことばにあなたは従っていませんと。この時に鍵になるのは、15節に「ふたりだけのところで」と書いていました。イエス様は、もしあなたの兄弟が罪を犯したなら、まずほかのだれかに連絡しましょうとも、長老や執事、自分の友人にまずは伝えましょうと口にはしていませんでした。そうではなく、まず「ふたりだけ」と、1対1で罪に気づかせてあげることが求められていたのです。いったいどうしてでしょう？なぜ最初からすべてを公にして、いろいろな人たちを巻き込んでそれをしようとしなのでしょう？それはこうして罪を戒めることが、相手を辱めることや必要以上に傷つけることが目的ではないからです。今までずっと見てきたように、私たちは何よりも愛する神の家族のひとりが、神様に立ち返ることを願うからこそ必要以上に公にはしないのです。罪に陥っている相手に心を配って、その人が何よりも罪に気づいて悔い改めて、そして神様に立ち返ることができるようにと必要な助けを与えようとするのです。間違いなく言えるのは、私たちが自分たちが持っている怒りとか不満を突きつけるために行くのではないということです。自分の受けた痛みを相手にわからせて、自分の正しさを押しつけるためのものでもありませんし、自分の主張を明らかにして、相手に何らかの罰や仕返しをするためのものでもありません。私たちが行くのは、私たちが望む人にその人がなることを願って行くではありません。私たちが行くのは、その人がキリストに似た者となることを願って行くのです。だからこそ、私たちが互いに行うすべてのことの土台として愛がありました。同じ神様を愛していて、そして同じ神様が喜ばれる者として生きていきたいと願っているからこそ、御霊とともに歩んでいる神の家族というのは、罪を犯して道からそれた者がいれば、その者が再び真理に立ち返ることができるようにとあわれみをもって、助けを与えよう

とします。愛する兄弟姉妹がキリストに似た者へとますます成長できるようにと互いに励まそうとすることです。ですから、これは緊急事態に行うものだけではありません。これは私たちが日常的に行うものです。私たちが、神様を愛する者として歩んでいこうとするのなら、私たちがキリストに似た者として歩んでいこうとするのであれば、私たちはいろいろなところに弱さを覚えていますし、いろいろなところで失敗をします。だから兄弟姉妹が必要なのです。愛をもって慰め、正してくれる者が必要なのです。御霊に満たされている兄弟姉妹が互いに問題に向き合うこと、それが罪に対して私たちが取るべき三つ目の正しい応答でした。

罪に対して私たちがとるべき正しい応答は、最初にも言いましたが、10個ありますので、まだ続いていきます。ここで区切らないでください。この後のことも同じようにして、きちんと自分自身のこととして考えてみましょう。そして私たちは、今どのように罪に対して応答しているのかを続けて考えてみてください。みことばは言っていました。罪を犯している兄弟姉妹がいても、まずは同じ神の家族に属していることを覚えること、罪の危険と恐ろしさを知っている者として、自分も弱さを持っている者として、あわれみをもって罪を取り扱おうとすること、そして、御霊に満たされて兄弟姉妹と向き合うことを、みことばは教えてくれていました。私たちは、今も互いに弱さや罪深さを持っています。だからこそ同じ神様を愛している家族として、互いに愛を示して助け合い、重荷を負い合いながら、今週も愛する主の栄光のためにともに歩んでいきましょう。